『劔岳　点の記』
追っかけ奮闘記（完結編）

牧野　美知子
（国立富山高専英語非常勤講師）

「私個人の秘密の試写会。みんなも誘って来て下さい。」と、2008年大晦日にかかった電話の向こうの監督の声は、出来上がった映画を早くみんなに見せたい、という喜びに弾んでいた。

こうして、2009年元旦の真夜中、ファボーレ東宝で、『劔岳　点の記』の非公式の試写会が行われた。東京では12月頃から関係者の間での試写会は行われており、木村監督はその評判で大きな手ごたえと自信を感じていたのだ。試写会に来た数十人の観客と共に、私たち「追っかけ組」も座席について、どきどきしながらスクリーンを見つめた。

実際のところ、私は怖かった。撮影が無事終了したことが最初の安堵だとすると、映画の完成は次の喜び。だが、子どもの成長と同様、喜びと共に心配は尽きない。その映画が、どんな映画になったのか、つまり私たちが感動する映画なのか…。それは、素人のくせに、撮影が終わった頃から時々胸を襲う不安であった。

が、試写会で数ヶ月ぶりで出会った監督の笑顔には、そんな不安は微塵もなかった。

では、その試写会で見た映画は？というと、確かに素晴らしかったのだが、なんせ終わったのが夜中の２時、途中で頭が朦朧としてきたのだ。ちょうど劔岳登頂のクライマックスに、ふと一瞬眠ってしまったのかも知れない。気がつくとみな頂上に立っていた…。実はこの場面について、のちに映画を見た友人たちの何人かが「登頂場面が物足りなかった」と口々に言った。そこで翌日監督から「どうだったか」と感想を聞かれた時、素晴らしかったです…！と答えたものの、もう１つ歯切れが悪かった。

１月26日、私たちは、２年間の追っかけ魂を認められ？富山での正式試写会と東映主催の「感謝の集い」に招待された。ところが、２度目の観賞であるその試写会では、映画の印象が

（感謝の集いにて　‘09. 1. 27）

１回目とはまるで違っていたのだ!!　最初に観た時感じた疑問点も全部消え去り、全てが受け入れられた。浅野さんの淡々とした演技も柴崎芳太郎の人柄そのものだと思い、登頂の場面は、オリンピックではないんだから栄光のファンファーレは必要なく、頂上に立って山々を見下ろす彼らの表情に内なる感慨が滲み出ていた。私たち招待された３人は、１回目と２回目、みな同様の感想を持って監督に伝えた。「完璧です。本当に感動しました！」

結局私は、毎回新しい発見を得ながら、映画館で８回観た。８回のうちの１つは、６月に東京有楽町で行われた皇太子殿下観賞のチャリティ試写会。これは東京まで映画を追っかけた貴重な経験だった。

さて、１月27日の富山の試写会の翌朝、監督は雄山神社から例の車で全国キャンペーンに出かけた。私たちも早朝から芦峅寺まで駆けつけ、監督の無事を祈って見送った。何としても映画を成功させなくては、と私たちができるささや

（全国キャンペーン見送り　‘09. 1. 28）

かな宣伝。追っかけの友と、東映から前売り券を160枚ほど買って、全国の親戚や友人に贈った。口だけで映画を勧めても行かないものなのだ。

また、前例がない、という壁を破って、全校生徒鑑賞会を実施した高校も。その校長は、映画の試写を観て感動し、「誰かがやらねば道はできない」と決行したのも爽快な応援のひとつ。

６月13日、全国に先駆けて富山でロードショーが始まった。ここまで来ても、監督は前日まで人が入るか不安にかられていた。当日、満席の会場を目にして、舞台挨拶に立った監督が涙で絶句する姿を見た。

またその日、思いがけなく、１週間後に発売される、監督の映画人生を書いた『誰かが行かねば道はできない』（キネマ旬報）を監督から頂いた。それは350ページの圧巻で、映画の道を突っ走った壮絶な人生が描かれ、読みながら何度も感動で震えた。

（雄山高校体育館で ‘08. 10. 24）

結局私は、『剱岳　点の記』の中に、命を賭けて究極のものを求める人間の凄さ、尊さ、という自分自身の見果てぬ夢を見たのだと思う。

撮影が無事終わって安堵したものの、東京へ帰ったロケ隊が二度と富山へ来ないと思うと淋しかった。が、監督は９月、大和のグランドプラザでのトークショーから始まり、雄山高校やファボーレなど年内に４回も講演で来県し、私はすべて駆けつけて楽しんだ。監督の講演は実に面白く、それなのに感動的で、どの講演もトピックは共通するところがあるがそれなりに違って飽きることはない。爆笑の中で居眠りどころではないし、あくびなどしようものなら鋭いカメラ・アイで発見され、「あくび、これで３回目だね」「どうして面白そうな顔をしていないんだ？」と突っ込まれ冷や汗ものだ。

けれど、マイク不要のその話術、次々と尽きることなく溢れ出る話題には、大勢のスタッフを引き連れて、あの奇跡的な撮影をやり遂げた人の、神のような力が見え隠れしている。映画応援の次にはこの講演にはまってしまった。その口から飛び出す映画への熱情や生き様に、同じ人間として驚嘆と感動にうちひしがれた。その頃、TV では『情熱大陸』、雑誌「キネマ旬報」では木村監督の類まれな映画人生が取り上げられ連載された。

2008年大晦日、我が家の電話が鳴り、声の主は木村監督だった。元旦の真夜中、ファボーレでやる非公式の試写会への招待だった。ついに映画は完成し、監督の声はこの上なくはずんでいた！

肥後もっこす

清水　隆子

今年の夏は記録的な猛暑だったので、秋の訪れがことのほか嬉しく感じられる。９月の半ばになり、もう勘弁して下さいと祈る気持ちになりかけた頃、ようやく朝夕の気温が下がり、救われた気がした。

両親が危うく熱中症になりかけたので、なおさらそう思う。

実家の母がいつになく元気のない声で電話をかけてきたのは、７月26日のことだった。

「今年はこれまでになく体調がおかしい。あせもが顔と頭皮と体中にできてつらい。頭もくらくらして倒れそう」

心配になり、よく話を聞くと、なんとエアコンが故障したとのこと。早く修理を頼むように言うと、

「お父さんが、戦中派は、これくらいの暑さは平気だと言うの。若い頃と今は違うと言っても聞かないの」

横浜で二人暮らしの両親は共に82歳。気持ちは若いが身体は年相応だ。青年時代と今ではとりまく環境が大きく違う。当時はヒートアイランド現象なんてなかった。最近は地球温暖化も進み、今年は7月半ばから気温が急上昇していた。

故障したエアコンは居間とダイニングキッチン用だった。母は日中の大半をそこで過ごすことが多いので、かなりこたえているようだった。炊事で火を扱うので、なおさらだ。熱中症で亡くなる人が増えているというニュースが頭をよぎった。

あらためて父にも話を聞いた。すると、動いたり止まったりしていたので、様子を見ていた。とうとう、うんともすんともいわなくなったので、設置した業者を呼ぶと言うのだ。

これで、安心だと思ったが、そうは問屋が卸さなかった。翌日、点検にやってきた業者から修理不能と言われてしまった。実家のエアコンは、冷房は電気、暖房はガスで動く、かなり前のタイプだった。父は同じものを強く希望したが、もう無いと言われて落胆した。

2日目、父の願いに別のスタッフがやってきた。似た型があったとの知らせだったが、不必用に思える工事を勧め、この暑い最中に床暖房も設置しましょうなどと言い出す始末。父は怒り心頭、即座に断り、それで一日が終わってしまった。

そして３日目、また別のスタッフがやってきて、父にこう言った。

「ご主人、この型はもうあきらめて下さい」

現在の床置き型ではなく、壁掛け型を別の場所につける提案をされた。その日のうちに見積りが届けられたところで母から電話がかかってきた。

「エアコンの性能がそれほど良くないし、工事代金もばか高い。これで良いのか決断しかねているの」

さらにこう続けた。

「お父さんがこだわるものだから、業者で３日もかかって。これ以上我慢できないから最新式のをすぐに電器屋さんで買ってって頼んでも、どうしても動いてくれない。全く肥後もっこすなんだから」

出た。母の話にたびたび登場する言葉が。頑固で妥協しない性格を指す熊本の方言だ。長年連れ添った同じ熊本出身の母が言うのだから実感がこもっている。

しかし母の次の一言に、びっくり仰天した。

「もう２週間も待ったのに、また伸びた…」

２週間も父は様子を見ていたそうだ。この猛暑の中、エアコンなしで半月以上も我慢していたなんて。

物を大切にし納得いくまで考えを変えない父、父に従い我慢の限界まで頑張り続けた母。良くも悪くも古風な二人だ。

天気予報で、８月の気温はさらに高くなると注意を呼びかけていた。

両親の命の危険を感じて、私はすぐに大型電器店に走った。二人の妹達と相談し、父を説得しつつ、母の希望の一番性能の良いのを探して手配した。

無事に設置できた時、ようやくほっとした。命拾いをしたと母は喜んでくれた。

新しいエアコンは、本体表面に室温が表示されるので、母が料理で火を使うと、たちまち温度が上がるのがわかる。さすがの父も母の辛さを実感したようだ。

戦後65年を懸命に生きてきた両親、天然記念物ものの父の肥後もっこすも、ほどほどにと思う。元気に秋を迎えられて本当に良かった。これからも異常気象にめげず、長生きをしてほしいと願っている。

朝の会話

深谷　眞志

勤務先のある六本木へは、K大附属病院が目の前にあるS駅から健康のため、往復2キロの道のりを毎日歩くことを日課にしている。

ある日のこと、ホームから改札口までの上りのエスカレーターに乗ろうと人の列に並んだが、急いでいるのか人を押し分けるように横から半ば強引に私の前に割り込んだ一人の男性がいた。たいていのことは我慢する私だったが、このときは腹も立ちよほど注意しようと思ったものの、人に押され男性を見失ってしまった。

それからしばらくしたある日、再びその男性と改札口で鉢合わせした。一瞬躊躇したが、過日の行為を思い出し、順番に並ぶようにと苦情が口をついて出てしまった。男性は最初反論したものの、素直に非を認め詫びられたため、私も多分に感情的になっていたのが恥ずかしく、恐縮した。男性はAと名乗り、私も名乗った。その朝、A氏も勤務先まで同じ道すがらだったこともあり、結局青山の交差点まで歩くはめになった。

その日から、決まった時刻に運行される電車を利用する私とA氏は、氏が乗車してくる新宿駅で顔を合わすようになり、S駅から青山の交差点まで、車両故障などのアクシデントや出張などを除き殆ど毎日歩くことが日課となった。

最初は天候など、他愛ない話を交わしていたが、次第にお互いの仕事や職場の話、家族の話や旅行、政治や経済など、あらゆるジャンルに話が及び、朝の会話は歩くことを厭わない私とA氏にとって一日のウォーミングアップに欠かせないものとなった。

朝の会話は仕事上のトラブルやなにか悩みごとがあると弾まないし、楽しくない。

私ごとで恐縮だが、公私ともに精神的にまいった時期があった。そんなとき、友人にも同僚にもなかなか話せないことが、他人であるA氏にはすべてではないが自然に話す機会があった。話すことによって多少は気が楽になり、問題の糸口や、発想を転換するきっかけともなった。

後日、NHKの番組で、うつ病にならない秘訣として、運動することと、一人閉じこもらないで、話し相手を見つけ、なるべく人と話すことの大切さを訴えていたが、自然とA氏のことを思い出してしまった。会話は悩み事そのものももちろんだが、困ったとき、他愛のない話でも聞いてくれる人間がいかに大切かといったことを教えられたような気がした。

私と同じく旅行好きなA氏は、新聞で募る団体ツアーに御夫婦でよく参加され、ツアーの話を聞くのも楽しみだった。私はこうしたツアーには参加したことがなかったので、屋久島、礼文島などの自然を訪ねるツアーの話には興味が尽きなかった。

私も取材等で全国を回る際に訪ねた温泉や地方都市の話などしたが、とりわけ、江戸時代から唯一外に開かれた窓口として、風光明美な美しい長崎の街には格別な愛着があり、はじめて同地を訪れた時の話などを折に触れてA氏に話した。

私が話したことがキッカケとなったかは分からないが、A氏は奥様と長崎行きのツアーに参加され、残暑の残る長崎で坂を上り下りし疲れたことや、ホテルの近くにとても鮮度の素晴らしい旨い肴を食べさせてくれる居酒屋があることなど話してくださった。しかし、氏は本社に異動することになり、長崎の話が氏から聞く最後のものとなってしまった。

三歳年長のA氏からいろいろと教えられたり、学ばせていただいたが、長崎の店の名前は聞いておくのだったと悔やんでいる。

プロフィール
㈳日本自動車整備振興会
歴史作家

秘湯の宿『駒の湯山荘』

名取三喜男

連日の猛暑にいたたまれずインターネットで偶然目にした新潟県魚沼市大湯にある「駒の湯山荘」を８月も終りの日曜日に訪れてみた。関越自動車道小出ICから30分足らずのところに、こんな静寂な空間があったことに驚かされる。

この宿は、日本秘湯を守る会の会員となっている山奥のまさしく山荘造りの一軒宿で、入口にはその提灯が吊るされ、秘湯であることを物語っている。

宿泊の手続きを済ませると風呂の説明をしてくれる。男性にはどの風呂も混浴となっている。また、どこも脱衣所は男女別で、女性にはエンジ色の厚手の巻タオルが用意されているので安心して入れるようだ。貸切露天風呂は二つあり、空いていればいつでも、いつまでも無料で入浴可能とのことである。日帰り入浴客は、露天風呂には入れず、別館の混浴の内湯のみが利用できる。宿の入り口や露天風呂の周りになぜか蚊帳で覆われている。これは、今年は暑さのためかまだ虻が多く飛び交っているため覆っているのだそうだ。

今日泊まる部屋に案内されるとマタタビ酒と胡桃を揚げたようなお菓子が用意されていた。山奥の山荘ならではのお持て成しを感じる。部屋には２基のランプが吊るされており、一つは灯油が入ったランプ、もうひとつは豆電球の付いたランプである。灯油が入ったランプは夕食時に宿で灯してくれるが、このランプの灯りはこの宿の静寂さにピッタリで幻想的な感じがしてとてもよい雰囲気だ。また、ここにはエアコンやテレビもなく、もちろん携帯電話も通じないため、ただひたすらお風呂に入って時間を潰すというのがこの宿の過ごし方のようで、風呂大好き人間には格好の宿である。

駒の湯山荘玄関入口

早速浴衣に着替え露天風呂に入ることにした。露天風呂には既に男2人と女1人の先客が入っていた。ホンノリと硫黄の匂いがするが気になるほどではない。入ってみると33度のお風呂ってこんなに冷たいとは思わなかった。女性に気を使いながら、すぐに隣の熱い沸かし湯に移動した。交互に入るとよいと言われたことに納得した。源泉は毎分2000ℓの湯が勢いよく掛け流されている。源泉にしばらく浸かっていると体に気泡が付く、これが肌をスベスベにするから女性にとってはたまらないだろう。先に入っていた女性も相当長い時間入っているようだ。33度のため夏の暑い日はよいが、気温が低い日はちょっと辛く感じるかもしれない。でも、この低さが何時間入っていてものぼせないで気分を爽快にし、長時間入ればいつまでもポカポカして湯冷めをしないらしい。私は夕食後ほろ酔い気分で入ったが、酔いが醒めるのが早く感じたほ

駒の湯山荘入口

部屋のランプ

露天風呂の建物

どだ。16時間入った人もいるというのも頷ける。

夕食は６時からで、この日は地元のシャモの生ハムや無農薬で飼育された黒毛牛のユッケなど海の物は一切なく、一品一品どれも真心こもった手作りの料理である。てんぷらは一品づつ揚げたてが出されるし、岩魚の塩焼きもテーブルに着いた後に出されるのでアツアツで食べられ嬉しい限りだ。煮物、漬物どれを取っても美味しく味付けられているため、ついつい酒が進んでしまう。夕食後は寝るまで時間がたっぷりあるため、どうしても風呂になってしまう。夜が更けランプが灯った露天風呂もまたいい。しんしんとした静寂さの中にせせらぎと源泉の掛けでる湯の音で気が休まる。

朝は、朝食までの間、ゆっくりと朝風呂に浸かることができる。ここの朝風呂は、熱い風呂と違って、身が引き締まり、全身の細胞が目覚める感じになる。朝食は７時30分からで、中でも納豆には説明書きが添えられ、越後の大豆を使って全国大会で二度日本一になっている大力納豆といい、拘りの逸品らしく、大変美味しくいただいた。

１泊であったが、世の中の情報が全く届かないこのようなところにいると、情報がないということにちょっと寂しく、多少の不安も感じるが、時にはこんなのも満更悪くもないとつくづく感じた。家でゴロっとしているより何故か心が和む。それというのもこの山の中の自然と女将をはじめ山荘の方たちの温かさのせいだろうか。私には一押しの宿になったことは言うまでもない。

（日本測量協会北陸支部）

別館内湯

貸切露天風呂

露天風呂

外湯

源泉情報

泉　　質	アルカリ性単純泉
効　　能	神経痛、リュウマチ、婦人病、筋肉痛、関節痛、五十肩等
源泉温度	33度

宿情報

住　　所	新潟県魚沼市大湯駒の湯温泉
電　　話	090－2560－0305（衛星電話）
アクセス	関越自動車道　小出ICより約30分
料　　金	・宿泊（１室２人利用）：本館　9,950円　　別館　11,000円　いろり付き14,150円 １人利用＋1,050円 ３泊以上は１泊に付き1,050引き（５月連休、８月は適用除外） ・日帰り入浴：500円、子供250円
お風呂	・貸切露天風呂２　・混浴露天風呂１　・内湯（女性専用・混浴）　・外湯（女性専用・混浴）
営業期間	４月下旬～11月中旬